

大かぶ（夏播き秋冬穫り）

栽培暦

月	7	8	9	10	11	12
作型						
夏播き		寒冷紗トンネル				

栽培の特徴とポイント

かぶは冷涼な気候を好み、15～20 前後でよく生育し、高温条件では根部の肥大が劣る。土壌に対する適応性は大根よりも広く、生育に適切な土壌酸度は pH5.5～7.0 の範囲である。

大かぶは、市場での取扱量が少ないため、供給過剰になりやすく価格の変動が激しい。そのため、県内での栽培は大半が加工業者との契約生産であり、契約に応じ、計画的な作付けが極めて重要である。

品 種

CR京千舞：千枚漬に適した「早生大かぶ」の形質を受け継いだ根こぶ病抵抗性品種。大かぶの形質が強い（タキイ） いため、肥大はやや緩慢です入りは遅い。根こぶ病には、比較的強い。ただし、粉剤は施用する。

CR京の味： 肌のツヤ、ヒゲ根の跡が少ないこと等を育種目標としているため、中小かぶ的な形質を強く（タカヤマ） 引いている。そのため、肥大が早い、穫り遅れでのす入りが懸念される。根こぶ病には、比較的強い。ただし、粉剤は施用する。

早生大かぶ：千枚漬、かぶら寿し用として、肉質が緻密な品種である。ただし、根こぶ病に弱い、根こぶ病の心配がないほ場でのみ利用する。

本ば管理

1 耕起及び畝立て

砕土率を高めるため、ほ場が適度に乾いてから耕起する。（トラクター走行は遅く、ロータリー回転は高速で行う。）

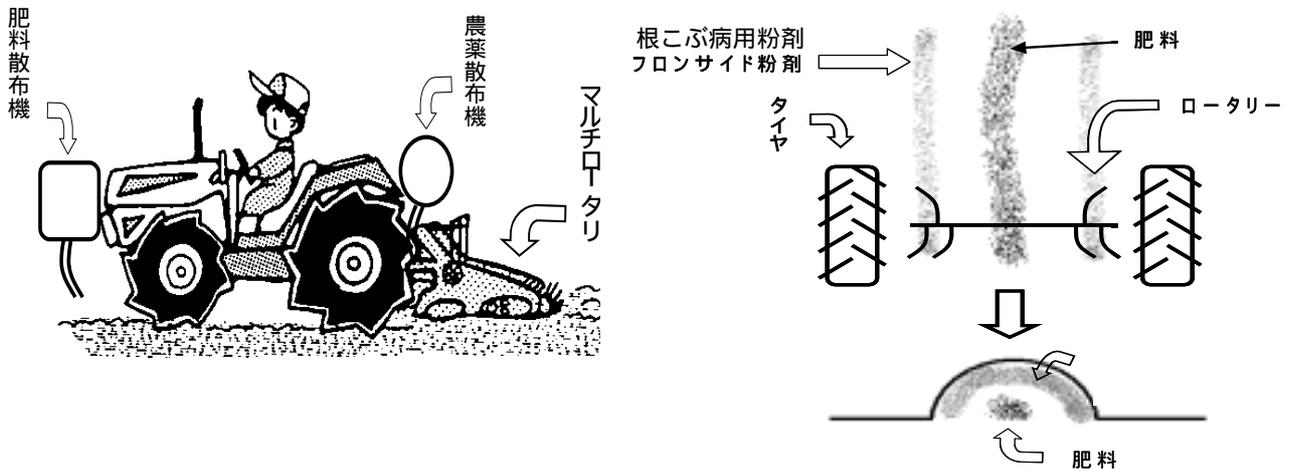
排水の悪いほ場では、畝を高くし、畝幅は80～100cm で、1条植えとする。

畝立て時には、根こぶ病対策として、必ず根こぶ病用の粉剤を散布し、土壌混和する

2 マルチ被覆栽培

計画的に播種するために、6～7月に、1台のトラクターで、耕起、施肥、根こぶ病の防除粉剤散布、マルチ張りを同時に行う。マルチは雑草対策のため、黒色マルチとする。

1) マルチロータリによる耕起・施肥・粉剤（根こぶ病）散布、マルチ張りの同時作業



作業上の注意点：肥料を施用する所が畝の中央となるように、マルチロータリ装着トラクターで作業する（図参照）。

これらの作業を6月中に行う。

根こぶ粉剤は、薬害防止のために土壌混和する。さらに、畝表面に重点的に施用されるように、サイドマルチロータリのロータリ部分に農薬散布機をセットする。

2) マルチ剥ぎ + 播種

播種日にマルチを剥ぎ取り、播種する。

約1ヶ月のマルチ被覆期間中に畦表面が消毒されるため、播種後に除草剤を散布しなくても、除草剤散布と同等の効果が期待できる。

3 施肥例

1) 早播きの場合（～8月中旬）（kg / 10 a）

肥料の種類	総量	基肥	追肥			成分量		
						N	P	K
苦土石灰	120	120						
FTE	4	4						
有機化成 (8-10-10)	80	80				6.4	8.0	8.0
苦土重焼燐	40	40					14.0	
硫酸カリ	10	10						5.0
尿素	10		10			4.6		
合計						11.0	22.0	13.0

かぶは、ホウ素欠乏が出やすいので、ホウ素入りの資材（FTE）を基肥として使用する。

早播きは、軟腐病等対策として窒素成分を減肥する。

2) 普通播きの場合 (8 月下旬) (kg / 10 a)

肥料の種類	総 量	基 肥	追 肥			成分量		
						N	P	K
苦 土 石 灰	120	120						
F T E	4	4						
高度化成 (13-13-13)	100	100				13.0	13.0	13.0
苦土重焼燐	40	40					14.0	
硫酸カリ	10							5.0
高度化成 (15-14-10)			30			4.5	4.2	3.0
尿素	10			10		4.6		
合 計						22.1	31.2	21.0

4 播種

1) 播種時期

- ・ 種子は 10a 当たり 1 デシリットル用意する。
- ・ 播種時期は 8 月上旬 ~ 9 月中旬とするが、8 月上・中旬には種する場合は、播種後、ウィルス病予防として寒冷紗等で被覆 (トンネル) する。

2) 播種方法

- ・ 播種作業は手押し式播種機等で行い、厚まきしない。

5 追肥及び間引き

- ・ 1 回目の間引きは本葉 3 ~ 4 枚時に行い、生育の旺盛過ぎるものや変形葉の株は必ず抜き取る。
- ・ 2 回目の間引きは本葉 5 ~ 6 枚時に行い、株間 35 ~ 40cm となるようにする。

病虫害防除

ウィルス病 早播きの場合、白寒冷紗を被覆 (トンネル) する。また、病気を媒介するアブラムシ類の防除を徹底する。

根こぶ病 額縁排水溝の設置と高畝栽培の徹底
 土壌酸度矯正 (土壌 pH を高くすると根こぶ病の発生が抑制される)。

軟腐病 降雨・強風が予想される直前・直後に銅剤等を散布する。

亀裂褐変症 額縁排水溝の設置と高畝栽培の徹底
 亀裂褐変の見られた圃場では、連作しない。

キスジノミハムシ 播種時に殺虫粒剤を施用する。剤によっては、条施用、株元施用など施用場所を変えたり、表層 3cm 程度の浅い土壌混和を行うことで効果が高まるものがある。

収穫・調製

1 収穫

播種後 65 ~ 70 日で根の直径 15cm、重量が 1 kg / 球程度 (葉付きで 2.5kg / 株) を目安に行う。

2 調製

- ・加工仕向けでは葉茎を落とす場合もあるが、通常市場出荷の場合は、茎葉を傷めないように洗う。
- ・加工仕向け、市場仕向けとも泥、砂が付着しないよう十分に洗い、その後の水切りを完全に行う。特に高温時の収穫の場合、水切りが不完全だと、根部の腐敗（軟腐病、べと病）を誘引するので注意する。
- ・加工仕向けは、メーカーの指示に従う。市場出荷の場合は、15kg 入り（入目 5 %）のポリ袋に入れて出荷する。

販売のポイント

末端の消費形態において、青果物としての取扱量は極めて少なく、大半が漬け物の原料として取り扱われている。そのため、青果物市場への出荷に加え、加工原料として加工業者との契約販売の販路を持つと有利。